

# 栽培体系の形成と伝播・拡散から見た 先史中国の稲作と地域社会

Rice Framing and Regional Societies in Prehistoric China  
—The Formation and Diffusion of Cultivation System—

楨林 啓介

MAKIBAYASHI Keisuke

## 要 旨

本稿では、先史中国における稲作栽培体系の形成と伝播・拡散を、長江流域と広東・広西地域を対象にして検討し、従来の中国考古学の中原中心史観を再考しながら先史中国の多元的稲作化過程と地域社会について考察した。

まず、イネ遺存体などの自然遺物から構築した農耕論だけでなく、農耕具などの農耕技術を表す栽培体系から構築する農耕論も相互に進めていく必要があるとし、栽培体系からみた長江流域とその地域社会について検討した。結果、少なくとも長江中流域と長江下流域の二つの栽培体系の形成があったことを指摘した。大規模な城壁集落を中心とした広域的な地域社会が両地域では独自の成立したと同時に、稲作の栽培体系の確立でも異なる道程を歩いたのである。中原中心史観のみで中国全体を捉えるだけでは不十分で、長江流域の少なくとも中流域と下流域のふたつの地域でも「中心」の形成があったことを強調した。

次に両流域系の栽培体系の伝播・拡散を、それぞれの流域を中心に据えて検討した。主にイネ遺存体で語られてきた稲作の出現と伝播・拡散の解釈とは、明らかに栽培体系のそれと異なることが分かった。栽培体系は耕作具と収穫具の関係から体系化した概念である。イネ遺存体が長江流域の周辺に拡散する分布を示すのに対して、先史時代においては長江中流域系と長江下流域系の栽培体系全体が周辺地域に伝播・拡散することはなかった。長江下流域系は、良渚文化の衰退に伴い、東南中国の雲石山文化と石峽文化の一部見られるが、体系的に確立した栽培体系が定着したとは現状認められない。

最後に、稲作のもうひとつの中心地帯である広東・広西の地域社会についても検討を行った。当該地域の先史社会は、イネの利用あるいは稲作の存在を知っていたと推測されるが、自らの生業経済を稲作経済へ移行させることなく、また長江流域系の稲作栽培体系も基本的には受容しなかったことを指摘した。

【キーワード】 稲作、栽培体系、長江中流域系と長江下流域系、地域社会、多元的形成

## 1. はじめに

中国の農耕を言う時に、華北の麦作地帯と華南の稲作地帯という区分がよく使われる。これは、淮河と秦嶺山脈をつないだ北緯 35 度付近を境界として、主に小麦と稲を栽培するに適した気候帯が分かれるためである。この淮河・秦嶺山脈ラインは栽培穀物の境界だけでなく、南船北馬に例えられるように中国を二分する文化的境界にも符合する（福永 1996）。地域区分の指標には、ほかに黄河流域と長江流域という地理的概念があり、前者で勃興した文明を黄河文明と呼び慣らわされてきた。後者の地域については 1990 年代後半以降、大規模な集落や墓が発掘調査されたことにより、先史長江流域の社会が文明段階に達しているかどうか議論されるようになった（巖 2000、上海博物館編 2004）。こうした動向の背景にあるのは、黄河流域では粟、黍、稗などの穀物を栽培する農耕、長江流域では稲作農耕の存在が明らかにされたことによる。

稲作は、こと我が国、日本の基層文化として弥生時代の稲作研究に代表されるように、考古学や民俗学などで現在でも関心の高いテーマでもある。稲作起源論は、1970 年代後半に提起された雲南・アッサム起源説（渡部 1977）から 1990 年代後半に提起された長江流域説（佐藤 1996）へと転換し、現在ではほぼ定説化しつつある。中国の各学界においても、この長江流域起源説をめぐる考古学研究の動向は、中国における稲作文化の重要性を喚起しただけでなく、「長江流域」という文化的枠組みを認識させ関心を高めることにつながったようである。代表的なものに、湖北教育出版社が編纂する『長江文化研究文庫』シリーズがあり、稲作、玉器、茶文化など様々なジャンルの事柄を長江単位で特集し、すでに 25 巻が出版されている。「長江」と「稲作」がひとつの文化的なキーワードとして認識され、取り上げられるようになってきたのである。

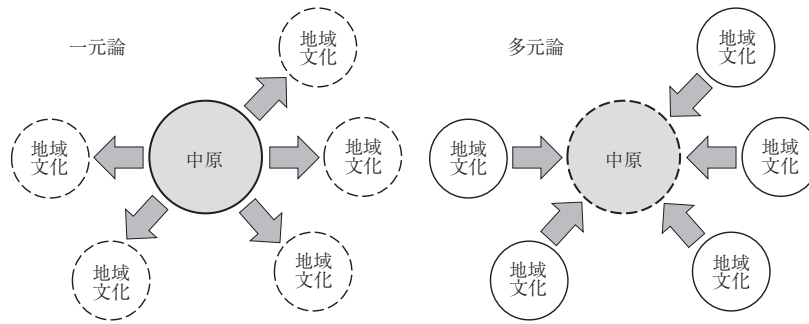
しかし、稲作は現代はもとより先史古代においても長江流域だけでなく、広東省や福建省などの中国南部、そして四川省・雲南省、あるいは黄河流域の一部にも広がっていた。黄河流域を除く地域では主食は伝統的に米を指す。中国の稲作文化を論じる場合には、長江流域という大きな枠組みが認識されるとは言え、稲作論の一部分なのであり、より広く俯瞰し続けるべきである。また考古学・歴史学に翻ると、稲作つまり農耕、歴史発展段階論や生業類型を考察する際に重要なキーワードとなってきたことは言うまでもない。近年、稲作起源地論が長江流域でひとまずは落ち着きつつあるなか、次の段階として稲作栽培体系の形成と社会の進展・発展との関係も再び積極的に考察していく必要がある。

そこで本稿では、先史における稲作栽培体系の形成に関する研究が中国文化論に果たす意義を、従来の考古学の視点を再考しながら考えてみたい。最終的には先史中国の多元的な稲作栽培体系を指摘したうえで、中原中心史観を再考しながら、各地域社会を中心に据えて稲作社会の形成について検討してみたい。

## 2. 中原文化の形成における一元論と多元論

まず、中国の考古学において古代中国の形成過程がどのように論じられてきたか見ておきたい。これには主に以下の二つの流れがあった。それは 1980 年代から 90 年代にかけて盛んに議論された一元論と多元論である（佟 1986、巖 1987、陳 2002）（図 1）。一元論とは、まず黄河中流域付近に中原文化が勃興し、その後周りに影響を及ぼし地域社会が文明化され発展していくというシナリオである（安 1957）。多元論とは、各地域には多くの中心となる文化的核があり、それが徐々に中原

図1 中原文化の形成における一元論と多元論のモデル（筆者作図）



に集まることによって、中原文化すなわち中国文明が形成されていくというものである（蘇 殷 1981、巖 1987）。一元論が主流だった 1950～70 年代ごろは、発掘調査が数少なく各地域の状況が未解明だったこともあり、中原的世界の優位性を強調しやすかった。それが、1980 年代に改革・解放政策と経済発展に伴い全国的に発掘調査が増加したことで、地域毎に豊かな考古学的文化が存在することが知られるようになった。地域毎で文化・社会の出現と形成過程が明らかになることで地域社会の多様性が主張されるようになったのである。現在では、当然のこととしてあまり強調されなくなったが基本的には多元論のもと研究は進められている。

この一元論と多元論は、本来はまったく異なる歴史観のはずである。しかし、実はいずれにしても中国文化・文明の歴史は中原を中心として形成されたという基本認識は同じであることを指摘したい。興味深いことに、論証に用いる考古資料も基本的には変わりはない。正確に言えば考古資料に対する考古学的知見と歴史観の根幹は変わらず、形成過程の解釈のみが変わったのである。経済発展以降の新発見や資料数の増加にともない地域社会の様相がより明らかになったとは言え、実は一元論が論じられていた 1970 年代にはすでに各地域の考古学的文化の存在は認識されていた。例えば、長江流域では良渚文化や石家河文化などがそれである。各地域の独自性が次第に明らかになっていくものの、のちの中原文化が中国の中心であり良渚文化や石家河文化は地域文化であるという歴史観の構図は変わらなかったのである。

最も大きな要因は、殷周そして秦漢という中国統一王朝史観が背景にあることにある。近年では、1996 から 2000 年に国家プロジェクトとして実施された夏殷周という中国の古代王朝の年代を特定する「夏商周断代工程」の影響もあって、夏王朝の首都に比定されている河南省二里頭遺跡の二里頭文化を中心に据えた議論が多く見られる。これは、さらに先史時代研究にも影響を与えている。長江流域の良渚文化や石家河文化は二里頭文化が BC 2000 年前後に出現するころにはすでに衰退しており、また同じころ二里頭文化には良渚文化や石家河文化の玉器などに類似するものがあり、文化要素の流入が見られる。さらに、二里頭文化系土器が広範囲に出土しており、二里頭文化自身も周辺地域に影響を与えていたことがわかっている。中国の中心となる中原文化の萌芽を二里頭文化に見出だそうとする以上は、一元論であっても多元論であっても、自ずと中心と地方（もしくは周辺）という構図となり、解釈もその域を出ないのではないだろうか。無論、地域文化の独自の形成過程を積極的に進める研究（樂 1997、徐 1996）もあるものの、全体としては一地域社会の形成史であり地域社会の相互交流がのちの中原形成につながるというパラダイムがすでに普遍化している。

### 3. 先史長江流域の稲作起源と初期国家形成論をめぐって

それでは、上記の先史中国文化論に、長江流域における稲作とその社会の研究はどう関係してきたのであろうか。稲作起源の研究は、前述のように当初、雲南・アッサムから始まり、浙江省河姆渡遺跡から約 7000 年前のイネ資料が出土したことを契機に長江流域へ関心が高まり、長江起源説へ転換していった（佐藤 2008）。その後、水洗選別法などの新しい方法の導入により発掘調査の精度があがり、長江流域におけるイネ遺存体の出土資料数は増加した。現在ではこれまで最古の稲作遺跡であった湖南省彭頭山遺跡の約 8000 年前の年代をさらにさかのぼる、約 11000 年前のイネ遺存体資料が浙江省上山遺跡から出土したことで長江流域の稲作起源がさらに支持されるようになった（浙江省文物考古研究所 浦江博物館 2007）。

いっぽう、長江流域でこれまでに湖南省城頭山遺跡、湖北省石家河遺跡などで環濠や城壁をもつ巨大な集落遺跡が明らかにされており、長江流域でも新石器時代後期における初期国家形成論が議論されてきた。また、イネ遺存体の出土数の増加に加え、江蘇省草鞋山遺跡で約 6000 年前の馬家浜文化の水田跡（藤原 1996）や、城頭山遺跡で BC 3500 年ごろの屈家嶺文化の水田跡（湖南省文物考古研究所 1999）が検出されるなど長江流域における先史稲作の内容も徐々に明らかにされるようになってきた。こうしたことから、黄河流域の龍山文化の内容に劣らないとされ、過大評価された側面はあるものの稲作を基盤とした文明論の構築へと発展していったのである（巖、安田 2000）。近年では浙江省良渚遺跡でも莫角山遺跡の大型基壇のみならず、周囲数キロにわたって取り囲む城壁が新たに見つかっており、長江の中下流域で城壁集落あるいは城壁都市が存在していたことになる。良渚遺跡群の調査は現在進行中で、城壁の内部構成や変化過程について未だ全容が見えない状況であり、今後の調査成果が待たれる。以上のように考古学的調査の成果を受けて、長江流域における稲作の起源と大規模集落（都市）の形成を根拠にした初期国家（都市国家）への形成過程が議論されているのである。

しかし、後者の初期国家の形成には農耕経済を基盤とすることが条件とされながらも、これまではイネ遺存体そのものの分析が主に行われ、農耕具やその技術から農耕技術の進展や農耕社会への発展過程が解明されてはきたわけではない。これは端的に資料数の少なさにあると思われるが、もうひとつにはイネ遺存体研究は、野生種や栽培種の同定により起源を明らかにすることはできるが、農耕技術や社会の進展までを論じることは難しいという資料的な制約があるからである。そこで考古学では集落や墓の大型化や階層化の分析が優先されてきた。ただ、近年では水田跡の検出が長江下流域を中心に増加しており、水田一枚の面積、灌漑水路の構造、畦畔や水口の有無などから水田構造の類型化と変化の過程についても議論できるようになってきた（丁 2004）。水田規模の調査や農耕具の分析なども今後、進展することで農業生産の側面からの初期国家形成論も再検討されることを期待したい。

### 4. 稲作の伝播・拡散をめぐって

稲作をめぐる研究は、イネ以外の植物遺存体資料も増加したことで起源地論だけでなく、栽培化過程についても議論ができるようになってきた。例えば、浙江省田螺山遺跡では野生種から栽培種へ比率が増加したことが明らかになっている（Fuller ほか 2010）。また、湖南省城頭山遺跡でもより古い段階ほど野生種の割合が高い傾向にあることが分かっている（張、顧 2005）。このように、

栽培化に段階があることが徐々にわかってきたことに対して、稲作の伝播・拡散の問題はあまり進んでいない。基本的には長江流域に最も古い出土例があり、長江流域から離れるごとに新しい時期のイネ遺存体の出土例が増えることから、長江流域を中心に波紋状に伝播・拡散することが想定されている(嚴 1997)。長江流域の中の一地点・一地域を起源地とする考え方をとる場合には、これまでは長江中流域の湖南省彭頭山遺跡が最も古かったため、長江中流域を中心地・起点にしていたが、2001年に長江下流域の浙江省上山遺跡の約11000年前にさかのぼる土器胎土中にイネ藁が含まれていたことにより長江下流域が起源地の候補となった(浙江省文物考古研究所ほか 2007)。

とは言え、起源地を両地域に想定することも可能である。しかし、イネ遺存体が自然遺物であるという資料的特性上、現実的には土器などの人工遺物のように類型化しその分布の変遷を追うことはできない。現状、分布論では図2のように示すことは可能であるが、当然のことながら実際に波紋状に拡がったわけでない。イネは植物であるから、気候や土壌の条件の制約を受けるし、自分で移動することもない。やはり、人間社会が介在した結果、伝播・拡散したはずである。よって、図2の波状文状の図示には、次の二つの問題をはらんでいる。一つは、前述のように自然遺物と言う資料的制限から、「長江(中下)流域」という一つの地理的枠組みが強調されてしまい、結果として「稲作」の拡散は「長江(中下)流域」を中心とした一元論になってしまっていることである。もう一つは、イネ遺存体の出土分布図であるにも関わらず、「稲作」の伝播・拡散図として誤解される可能性がことである。分布図自体が、稲作や稲作技術、稲作社会を直接表しているわけではない。

稲作の起源地が、出土資料の古さでは長江中流域と長江下流域の二地域が候補地として挙げられ、さらに両地域で野生種から栽培種への変化過程が見られることから、稲作の多元的発生も否定できない。また、その拡がりには、コメのみが運びこまれた可能性もあり(中村 2006)、実際の様相の解明には多くの検討を要する。そこで、筆者は以前に考古資料と農耕研究を方法論的に体系化し、栽培体系と食文化体系に関わる考古資料から先史中国の農耕文化の形成について取り組んだことがある(楨林 2008)。次章では、そのなかでも栽培体系からの研究を紹介しながら、稲作に関わる伝播・拡散の問題に一步踏み込んでみたい。

## 5. 栽培体系からみた長江流域の地域社会

結論から述べると、長江流域には少なくとも二つの栽培体系が形成されたと指摘できる。すなわち、長江中流域系の栽培体系と長江下流域系の栽培体系である。

前章までに指摘したように、イネ遺存体などの自然遺物から構築した農耕論だけでなく、農耕具などの農耕技術を表す栽培体系から構築する農耕論も相互に進めていく必要がある。このため、栽培体系に関わる耕作具と収穫具の組成とその変遷を地域ごとに分析をした。ここで留意したのは、

図2 中国史前稲作農業分布区逐期拡大的形勢図  
(嚴 1997より引用)

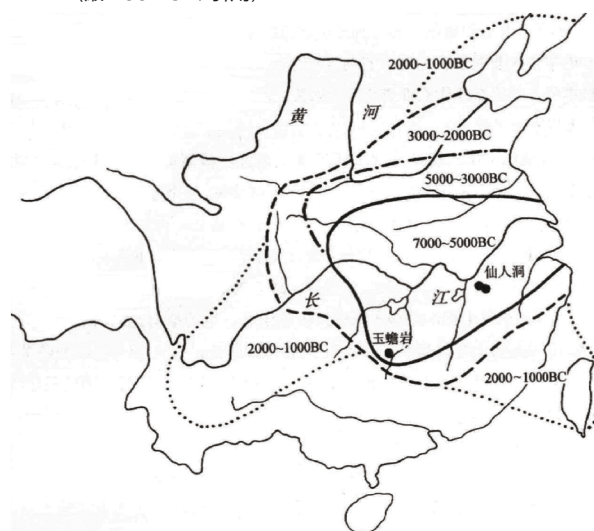
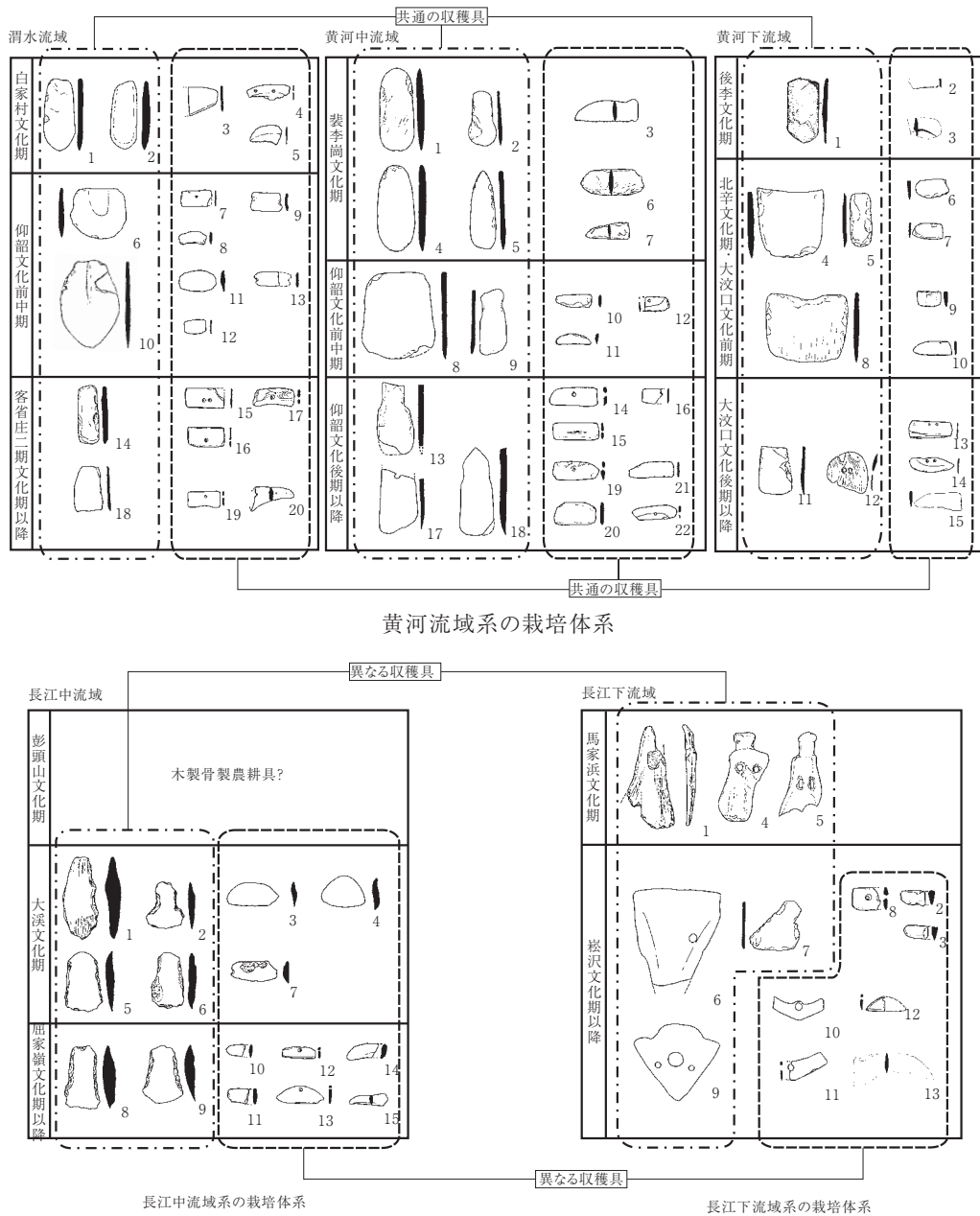


図3 黄河・長江流域における栽培体系の形成と変遷 (楨林 2008 を改変)



資料を型式学的に細分するのではなく、どのような耕作具を使って耕し、どのような収穫具を使って収穫をするのかという農耕具のセット関係に注目をしたことである。つまり、農耕具をセットで見ること、背景にある栽培技術の体系を導きだそうとしたのである。

結果、黄河下流域・中流域・渭水流域では同じ栽培体系を共有し、長江流域では長江中流域と下流域とでは違う栽培体系が独立的に形成したことが分かった(図3)(楨林 2008)。いわゆる考古学的土器文化ごとに農耕具の分類と変遷を明らかにし、その後より広い地域を対象に比較検討したのである。渭水流域、黄河中流域、黄河下流域では、それぞれに考古学的土器文化が存在したのだが、それらとは関係がなく地域を越えて共通の耕作具と収穫具が存在していた。このことから、黄河流域全体に共通する栽培体系があったと解釈できるとした。「黄河流域系」の栽培体系としても良いだろう。いっぽう、稲作地帯という一つの地域概念で括られてきた長江流域であったが、長江中流域と下流域とでは農耕具そのものが異なり、相互に影響も認められなかった。つまり、両者

の栽培体系は農耕具から見る限りは異なる体系であったことになる。両流域でイネ遺存体の出土があるにもかかわらず、異なる二つの稲作栽培体系を指摘することが可能になったのである。これを本稿では、「長江中流域系」と「長江下流域系」の栽培体系として明確に区分する。

もう少し論じる。両地域では、約 11000～8000 年前に遡るイネ遺存体資料が出土し、どちらも稲作起源地の候補であること、また時代が下るにつれ野生種から栽培種の比率が高まっていたことを前述した。稲作が、出現当初から体系化された技術としてすでに成立していたわけでないことは自明である。先史時代の両地域は、イネの利用から稲作技術の確立まで試行錯誤しながら創りあげてきたのである。事実、両地域の新石器時代前期では農耕具に関する考古資料はほとんど見られない。もちろん、木製・骨製農耕具は存在したと思われるが、新石器時代後期に揃う農耕具と比べると歴然と異なる。

長江下流域の浙江省上山遺跡では、農耕具とされる遺物は出土していない（浙江省文物考古研究所ほか 2007）。杭州湾南岸の河姆渡文化に属する河姆渡遺跡や田螺山遺跡では、牛の肩甲骨で製作した骨耜と呼ばれる資料が多数出土している。耕作具として想定できる確実な資料であるが、穂摘具や鎌に認定できる遺物は出土していない。このことは杭州湾北岸や太湖周辺の馬家浜文化でも同様である。しかし、続く崧澤文化以降では、耕作具とされる三角形の石犁や収穫具の鎌が出土するなど、新しい農耕具が出現し、かつ種類も増加した。長江中流域では、彭頭山文化には農耕具と確実に認定できる資料は出土していないが、続く大溪文化以降、打製耕作具が出現し、そして屈家嶺文化以降、黄河流域からの伝播により、石刀と呼ばれる穂摘具や鎌が出現した。長江下流域のように農耕具種類の変化や増加が顕著に認められないが、新石器時代前期の様相とは明らかに異なる。つまり、両地域は技術革新をしながら、独自の稲作技術を創造・開発したのである。今後、水田遺構の事例が増えれば、水田構築に関する両地域間の相互交流が明らかになる可能性は残るものの、現状では農耕具に関して両者は独自のと言える。このことから、長江中流域系と長江下流域系の栽培体系を明確に区分したのである。

次に栽培体系を社会との関係で見してみる。第 3 章で初期国家形成論について言及したが、初期国家形成が想定される新石器時代後期の長江中流域では石家河文化、同下流域では少し時代が上がるが良渚文化が盛行していた。これらの考古学的文化は稲作を基盤とした社会を形成していたことはすでに異論がないところである。栽培体系の形成を念頭に置くと、石家河文化や良渚文化の社会は、それぞれに稲作を基盤とする生業を構築し、かつその過程は基本的には独自のだったと説明できる。生業の一カテゴリーとして「稲作」がすでに存在していたわけではなく、当時の彼らの社会からすると稲作を「創造」し成立させたのである。

では、なぜ異なる栽培体系が形成されたのか。それは集落や墓による先行研究が明らかにしてきたように、両地域でそれぞれに地域社会が形成されてきたことに他ならない。いずれの地域にも拠点集落もしくは中心集落と想定できる遺跡があり、一定の地域的まとまりとネットワークを築いていたことがすでに指摘されている（郭 2012、今井 1997）。地域社会の中心がそれぞれに存在したのである。これに関連して、筆者は栽培体系が地域社会を構成する基層文化のひとつであるとの観点から、先史時代におけるこうした独自の両地域社会とその形成を、後世の楚や呉越と類似する地域性を示すことを指摘したことがある（榎林 2011）。先史中国の形成は、中原化のみで全体を捉えるだけでは不十分で、長江流域の少なくとも中流域と下流域のふたつの地域でも「中心」の形成があったことを強調したい。

ところが、石家河文化や良渚文化は次の段階にスムーズに移行してはいない。双方の中心遺跡と言える石家河遺跡群や良渚遺跡群はそれぞれの文化段階を以って断絶する。いずれの文化も紀元前

2000年紀に入る前に衰退したのである。良渚文化自体は広富林文化、馬橋文化に断続するが、石家河文化に後続する考古学的文化は未解明のままである。このことを念頭に、次章では両流域の稲作栽培体系の伝播・拡散について具体的に見ていくことにする。

## 6. 長江中下流域系の各稲作技術体系の伝播・拡散から見た先史地域社会

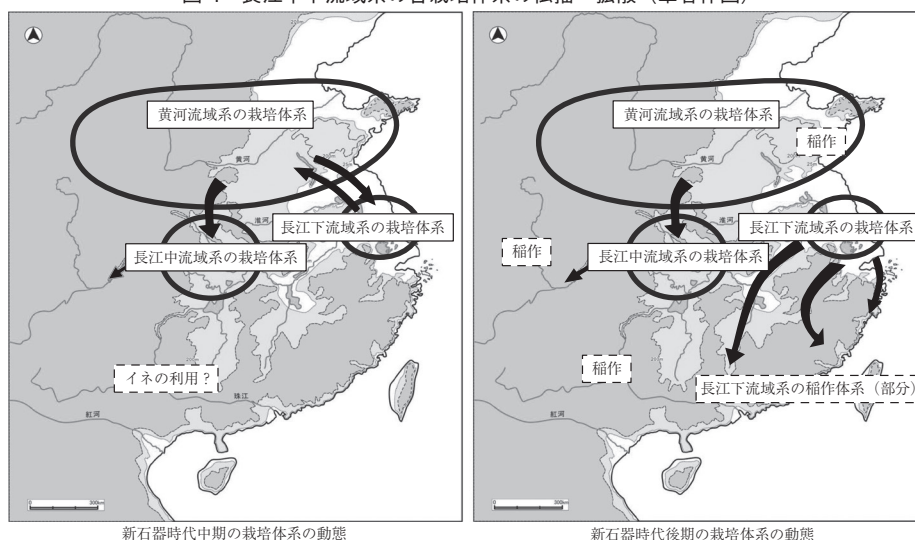
長江中流域と同下流域をそれぞれ中心に据えて、稲作栽培体系もしくは関係する考古資料の伝播・拡散を検討する(図4)。前章で少し触れたが、基本的には新石器時代を通して両流域系の栽培体系そのものが他地域に拡がり出現する様相はない。また、長江中流域系の耕作具は石家河文化とともに衰退する。

### 1) 長江下流域系の栽培体系

崧澤文化や良渚文化の遺跡では、すでに畦畔で用水路を伴う区画された水田も発見されている。石犁の存在と合わせて考えると、稲作の栽培体系が灌漑を伴う水田稲作の水準まで達していたと想定できる。だとすると、「農耕社会」的な社会構造と社会システムが存在し、農耕具の生産、灌漑水田の構築・管理などが社会内で協業されていたことになる。それは、玉器の威信財交換システム、そして大型基壇(莫角山遺跡)や大型墓(反山遺跡、瑤山遺跡)が表す階層性から見て取れる王権の存在(中村2003)からも裏付けられる。

さて、周辺地域への拡がりを見ていく。北側の黄淮平原や黄河流域とは収穫具の穂摘具とされる刀類や鎌類の出土分布に変化が見られる。穂摘具である刀類は崧澤～良渚文化期に黄河流域から長江下流域へ伝播したとされている(寺沢1995)。長江下流域系の栽培体系は黄河流域系の収穫具を受容したことになる。直角鎌は現状では長江下流域の崧澤文化に最も古い出土例があることから、同流域で出現し黄河流域へ拡がった可能性がある(楨林2007)。西側の長江中流域へは相互に伝播した農耕具は見られない。南側では、沿岸ルートと内陸ルートとに伝播経路が考えられている。沿岸ルートでは、東中国海沿岸地域の新石器時代後期の福建省曇石山文化に石鎌と牡蠣製の耕作具が出土している(福建省博物館1976)(図5左上)。石鎌は良渚文化のものと類似しており影響が指摘されている(後藤2006)。江西省の潘陽湖平原を経由する内陸ルートでは、琮などの玉器や

図4 長江中下流域系の各栽培体系の伝播・拡散(筆者作図)





有孔石斧などの資料から、良渚文化の衰退後、紀元前 2000 年前後にかけて、北から良渚文化—北陰陽營—薛家崗文化—樊城堆文化—石峡文化の順で文化連鎖があったとされ（中村 1996）、その南端の新石器時代後期の石峡文化ではイネ資料と有孔長方形の石刀が出土していることから良渚文化に由来する稲作も伝播したと考えられている

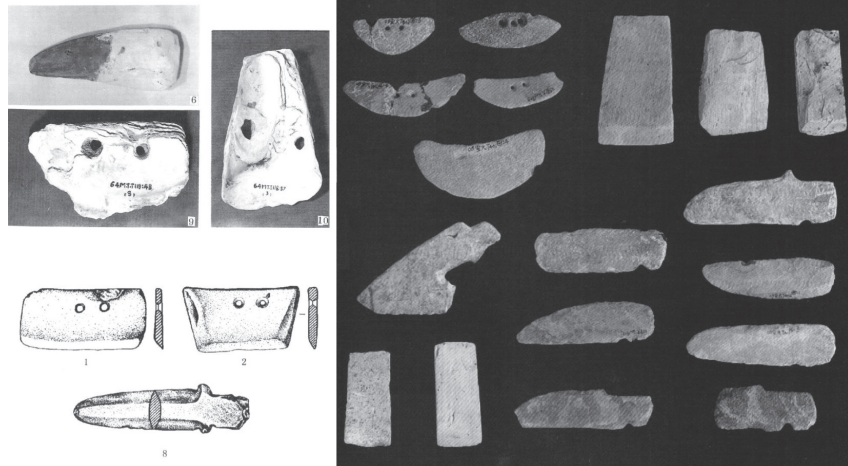


図5 長江下流域系の栽培体系に関わる農耕具  
 左上：曇石山遺跡。左下：呉城遺跡。右：安樹墩遺跡。

（後藤 2011）。ただし、そのほかの農耕具資料については不明で長江下流域系の栽培体系の一部が南下したとしか現状説明できない。良渚文化で確立した灌漑水田稲作が行われていたかは検討を要する。また、時期が下る中原の二里崗上層期から殷墟期に相当する、潘陽湖周辺に分布した呉城文化の呉城遺跡の出土農耕具に長方形石刀と直角鎌がある。同遺跡では青銅製戈を模したとされる石戈も共伴している（図5左下）。長江下流域の浙江省安吉県大樹墩遺跡（図5右）からも同様の直角鎌と石戈とが共伴していること（浙江省文物考古研究所編 2009）から相互関係が指摘でき、内陸ルートを紹介した継続した文化交流の存在を示すのかもしれない。ただ、呉城文化が殷文化の影響を受けていること（彭 2005）からすると、新石器時代以降の稲作の具体については長江下流域系だけでなく長江中流域を経由した黄河流域系の栽培体系も検討する必要がある。

このように、現時点での出土資料を見る限り、長江下流域系の栽培体系の周辺への伝播は、新石器時代後期になって良渚文化の衰退に伴い曇石山文化と石峡文化に一部見られるが、良渚文化で確立した栽培体系が定着したとは現状認められない。

## 2) 長江中流域系の栽培体系

長江下流域同様に大型城壁集落（都市）が営まれ屈家嶺文化から石家河文化にかけて初期国家が形成する過程を示している。湖南省城頭山遺跡では水田遺構も検出され灌漑水田を伴う稲作がすでに営まれていたとされている（小柳 2009）。ただし、発掘調査数に反して農耕具に関する資料はそれほど多くなく、耕作具と収穫具に関わる栽培体系はさらに検討の余地を残している。現時点での資料から検討すると、収穫具の磨製石刀と石鎌は屈家嶺文化の時期に北側の黄河流域からもたらされたものである。打製石鋤などの農耕具は大溪文化以来の伝統を維持しており、これらが逆に黄河流域へ伝播することはない。東側の長江下流域との関係は前述のとおりである。南側への伝播を見よう。洞庭湖が広がる低平原の縁辺部に稲作遺跡が分布する。この洞庭湖平原から南へは湘江水系と沅江水系を遡上し広東・広西へいたるルートがある。後述のように、彭頭山文化の粗製丸底罐や湯家崗文化・大溪文化の白陶土器に類似する土器が広東・広西地域でも出土することから、主に長江中流域側から南への文化的影響があったと言われている（西谷 1997）。しかし、栽培体系に関わる農耕具の伝播は認められない。西側の四川盆地へは長江流域を遡上するルートが考えられる。四川盆地の手前までは長江中流域系と類似する打製石鋤が出土している。しかし四川盆地に入ると

長江中流域系の栽培体系に関わる遺物は見られない。

こうしたことから、長江中流域系の栽培体系は新石器時代を通して基本的には拡がることはなく、石家河文化とともに衰退する。下る二里崗文化期の盤龍城遺跡では長方形石刀や直角鎌の出土している（湖北省文物考古研究所編 2001）。盤龍城遺跡が殷の侵出拠点とされることから、黄河流域系の栽培体系の収穫具が持ち込まれ、新石器時代に形成された伝統的な栽培体系は黄河流域系の影響を受け変化したことも想定できよう。

以上のように、新石器時代における長江流域の二つの栽培体系は基本的には周囲に伝播・拡散することはなかった。また、それぞれの地域でイネの利用に始まり栽培化に成功するまでの過程はあったものの、その確立した耕作から収穫までの一連の農耕技術は、初期国家段階とされる新石器時代後期のそれぞれの文化（良渚文化や石家河文化）とともに一時的に衰退したのである。むしろ、良渚文化や石家河文化の地域社会が安定的に営まれているときには、両者の稲作栽培体系も伝播・拡散することもなかったと考えたい。

## 7. もうひとつの稲作社会の中心—広東・広西地域の栽培体系

ところで、歴史上、稲作地帯は長江流域だけでなく華南一体に拡がる。なかでも広東の珠江流域の平野ではとくに宋代以降開発が進み、水田と養蚕と養魚を組み合わせた桑基魚塘が盛行した地域である。古代では南越国の本拠地でもあった。新石器時代にはまだ大規模な城壁集落や大型墓の出現は見られないが、出土資料から新石器時代後期に一部の地域で稲作を行っていたと考えられている。最後に前章と重複する部分もあるが、広東・広西地域を視点の中心に据えて稲作に関わる栽培体系の問題を見ていきたい（図4）。

広東・広西地域は野生稲の生息地域にもかかわらず、新石器時代遺跡でイネ遺存体資料の出土時期が遅いため稲作起源地の候補には挙がってこなかった。むしろ、自然環境が多様で豊富な食料資源が存在することから基本的には狩猟採集経済とされてきた。とくに沿岸部や内陸の河川部では貝塚遺跡が多く確認されており、魚貝類を中心にした生業経済が発達していた（袁 1995）。また、稲作以前には根菜類等の植物栽培がすでに始まっていた可能性もあるが、農耕経済と呼べるまでの比重はなかったようである（趙 2006）。

当該地域が独自に稲作を始め、稲作栽培体系を確立させた過程が分かる考古資料はまだ見つからない。新石器時代後期になって、北江上流域の石峡文化の遺跡で長方形石刀がわずかに出土する程度であり、良渚文化の影響のもと稲作が行われたと推定されている（後藤 2006、2011）。長江中流域系の栽培体系はどうだろうか。広東地域では長江中流域の新石器時代中期の湯家崗文化・大溪文化の圈足盤土器と類似する土器が出土しており、新石器時代後期以前から文化交流が存在していた（西谷 1997）。また、西側の広西地域では、新石器時代前期の長江中流域の彭頭山文化に類似する粗製の丸底罐が出土しており、湖南省側の沅江水系と広西省側の漓江水系を介した交流が早い段階から認められる。新石器時代中期以降は長江中流域からの明瞭な文化的な影響は減少すると言われている（彭ほか 2007）が、彭頭山文化はすでに稲作が存在していたことから、少なくとも広西地域の社会は長江中流域の稲作あるいはイネの食用についての情報を持っていたと十分に考えられる。むしろ、農耕具の状況は彭頭山文化でも不明なところが多く、その意味では類似している。同時期の広西地域でも稲作もしくはイネの利用を行っていた可能性は否定できない。土器胎土に混入するイネ藁やイネ粉などを丹念に分析することが望まれる。

問題は、その後である。長江中流域の大溪文化では耕作具に打製石鋤を用いていた。広東地域で

は「打製石鋤」の出土はなく、かつ石器群の様相は有肩石斧や有段石斧の出土から長江下流域と関係する（後藤 1996）。新石器時代後期にいたっても状況は変わらない。広東地域では長江中流域系の稲作栽培体系は受容されなかったと言える。ところで、石峡文化の地域範囲は北江上流域に留まる。江西省の贛江流域を經由して南下した良渚文化系の文化、さらには長江下流域系の稲作栽培体系も珠江平原までは入ってこなかったのである。こうしたことから、広東・広西地域ではイネ利用や稲作の存在を知っていたと推測されるが、自らの生業経済を稲作経済へ移行させることなく、また長江流域各系の稲作栽培体系も受容することはなかった。本格的な灌漑水田を伴う稲作は南越国の時代、そして漢への編入以降ということになろう。

## 8. 結論と今後の課題：稲作栽培体系の形成から見た先史中国社会の構図

本稿では、農耕具を対象にした栽培体系から、とくに稲作地帯とされる長江流域以南の地域社会を再検討した。長江流域に形成された栽培体系を「長江中流域系」と「長江下流域系」とに明確に区分することで、農耕技術の側面から稲作と地域社会の問題に取り組めるようになった。主にイネ遺存体で語られてきた稲作の出現と伝播・拡散の解釈は、明らかに栽培体系のそれとは異なることが分かった。栽培体系は農耕具と収穫具の関係から体系化される概念であるが、イネ遺存体が長江流域の周辺に拡散する分布を示すのに対して、確立した栽培体系を保ったまま周辺に伝播・拡散する様相は見られなかった。従来、稲作は新石器時代後期に周辺地域に伝播するとされていたが、長江中下流域で初期国家の生業を支えるまでに確立した「栽培体系」ではなく、部分的伝播・拡散状況しか読み取ることができない。さらに、周辺では長江中下流域で成立した大規模集落や大型墓も見つかっていない。

これら稲作に関わる栽培体系を形成した二つの地域は、それぞれに中心・核となる地域社会が形成された地域でもあった。同じ稲作を営む社会ではあるが、栽培体系、ここでは稲作技術の確立には異なる道程を歩んだと言える。つまり、先史中国では多元的な稲作化過程と地域社会の形成があったのである。これは、中原中心史観とは異なる議論であり、中国世界がもつ多元性をよく表していると言えよう。

新石器時代後期に成立した稲作栽培体系は、その後、紀元前 2000 年紀前後に良渚文化や石家河文化とともに衰退する。もうひとつの稲作地帯である広東・広西地域でも確立した栽培体系を見ることはなかった。しかし、後世、灌漑水田稲作は高度に発達し、長江流域以南さらには東南アジアや朝鮮半島南部・日本列島へと広く普及していく。一時期、衰退した稲作栽培体系がいかに再び社会生業基盤として成立していくか、今後検討する必要がある。また、長江流域以外に拡がった稲作は、それぞれの地域でどのような稲作栽培体系へと再形成したのか調べることでさらに多元的な稲作地域社会を復元することもできよう。

---

## 参考文献

- 安志敏 1957 「試論文明的起源」『考古』1957年5期  
 今井晃樹 1997 「良渚文化の地域間関係」『日本中国考古学会会報』7号  
 袁靖 1995 「關於中國大陸沿海地区貝丘遺址研究的幾個問題」『考古』1995年5期  
 郭偉民 2012 『新石器時代滬陽平原与漢東地区的文化和社会』文物出版社  
 嚴文明 1987 年 「中国史前文化的統一性与多样性」『文物』第3期 文物出版社

- 嚴文明 2000『農業發生与文明起源』科学出版社  
 嚴文明 安田喜憲 2000『稻作陶器和都市的起源』文物出版社  
 湖南省文物考古研究所 1999「澧県彭頭山遺址古城址一九九七～一九九八年度發掘簡報」『文物』1999年6期  
 湖北省文物考古研究所編 2001『盤龍城—1963-1994年考古發掘報告』文物出版社  
 小柳美樹 2009「中国新石器時代の稻作農耕の展開」『弥生時代の考古学』第5巻 同成社  
 後藤雅彦 1996「良渚文化と東南中国の新石器文化」『日中文化研究』11号  
 後藤雅彦 2006「紀元前2000年紀の閩江下流域」『琉球大学法学部人間科学科紀要 人間科学』17号  
 後藤雅彦 2011「先史東南中国における稻作農耕の再検討」『地理歴史人類学論集』2  
 佐藤洋一郎 1996『DNAが語る稻作文明—起源と展開』NHK出版  
 佐藤洋一郎 2008『イネの歴史』京都大学出版会  
 上海博物館編 2004『長江下游地区文明化進程學術検討会論文集』上海博物館  
 徐湖平編 1996『東方文明之光—良渚文化發現60周年紀念文集（1936-1996）』海南國際新聞出版中心  
 浙江省文物考古研究所編 2009『浙江考古新紀元』科学出版社  
 浙江省文物考古研究所 浦江博物館 2007「浙江浦江県上山遺址發掘簡報」『考古』2007年9期  
 蘇秉琦 殷偉璋 1981「關於考古学的区系類型問題」『文物』1985年5期  
 趙志軍 2006「対華南地区原始農業的再認識」『華南及東南亞地区史前考古—紀念甌皮岩遺址發掘30周年國際學術  
 検討会論文集』文物出版社  
 張文緒 顧海濱 2005「湖南澧県城頭山遺址古稻研究」『作物学報』2005年6期 嚴文明 1997「稻作起源研究の新進  
 展」『考古』1997年9期  
 陳星燦 2002「從一元到多元：中国文明起源研究的心路歷程」『中原文物』2002年2期  
 丁金龍 2004「長江下游新石器時代水稻田与稻作農業的起源」『東南文化』2004年2期  
 寺沢薫 1995「中国古代收穫具の基礎的研究」『東アジアの稻作起源と古代稻作文化』佐賀大学  
 修柱臣 1986年「中国新石器時代文化的多中心發展論和發展不平衡論」『文物』第2期  
 中村慎一 1996「良渚文化の滅亡と「越」的世界の形成」『講座 文明と環境』第5巻  
 中村慎一 2003「玉の王権—良渚文化期の社会構造—」『古代王権の誕生 I 東アジア編』角川書店  
 中村慎一 2006「黄河の米」『生業の考古学』同成社  
 西谷大 1997「中国東南沿岸部の新石器時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集  
 福永光司 1996年『「馬」の文化と「船」の文化』人文書院  
 藤原宏志 1996「草鞋山遺跡における初原的水田稲作」『稲作起源を探る—中国・草鞋山遺跡における古代水田稲作  
 一—』日本文化財科学会  
 福建省博物館 1976「閩侯県曇石山遺址第六次發掘報告」『考古学報』1976年1期  
 彭長林 吳艾妮 周然朝 2007「試論广西新石器時代文化」『广西考古文集』第3輯  
 彭明瀚 2005『吳城文化研究』文物出版社  
 槇林啓介 2007「收穫具から見た中国新石器時代の農耕文化の変容」『日本中国考古学会第17回大会予稿集』日本  
 中国考古学会  
 槇林啓介 2008「中国新石器時代における農耕文化の形成と変容—黄河・長江流域における農耕具・加工調理具を  
 中心にして—」『東アジアの文化構造と日本的展開』北九州中国書店  
 槇林啓介 2011「「中国」文化形成の多様性と基層性—栽培体系・食文化体系に関するモノ・物質文化資料から—  
 『“モノ”語り—民具・物質文化からみる人類文化— 国際シンポジウム報告書II』国際常民文化研究機構・神奈  
 川大学日本常民文化研究所  
 樂豊実 1997『海岱地区考古研究』山東大学出版社  
 渡部忠世 1977『稲の道』NHK出版  
 Fuller, D., Qin, L., Zhao, Z., Zheng, Y., Hosoya, A., Chen, X. and Sun, G., 2010, Archaeobotanical Analysis at  
 Tianluoshan: Evidence for wild-food gathering, rice cultivation and the process of the evolution of  
 morphologically domesticated rice, Nakamura, S. (中村 慎一 編), edit., Interdisciplinary Study of  
 Tianluoshan site in Yuyao, Zhejiang Province, (浙江省余姚田螺山遺跡の学際的研究), Kanazawa University  
 (金沢大学)

---

## 図版典拠

---

- 図1 中原文化の形成における一元論と多元論のモデル（筆者作図）  
 図2 中国史前稲作農業分布区逐期拡大的形勢図（嚴 1997より引用）

図3 黄河・長江流域における栽培体系の形成と変遷（楨林 2008 を改変）

図4 長江中下流域の各栽培体系の伝播・拡散（筆者作図）

図5 長江下流域系の栽培体系に関わる農耕具

（左上：曇石山遺跡。左下：呉城遺跡。右：安樹墩遺跡。）

（左上：福建省博物館 1976、左下：彭 2005、右：浙江省文物考古研究所 2009 を改変）